

自然誌 だより

Natural history

三重自然誌の会情報誌 120 号

2019年 6月

バイケイソウをすすするシカ

ニホンジカのひとエリアへの侵入が止まりません。私の住む松阪市西郊の水田地帯でも、3年ほど前から夜間はシカ天国と化しています。シカ増加の原因については、いろいろとされていますが、これまで緩衝地帯の役割を果たしていた山間集落における人間の影響力低下も一因でしょう。山間部を訪れると、放棄された田や畑に草が生い茂り、シカ達の重要な餌場になっていることがわかります。増えたシカは、口が届く範囲の山の植物も食べ尽くし、残されているのは毒をもつ植物だけとなっています。しかしながら、昨今はシカ達もさすがに食糧不足のようで、毒植物さえも食べるようになってきました。写真1は、バイケイソウの葉を食べているシカです。バイケイソウはアルカロイドを含み、食べると嘔吐や血圧低下を招くそうです。この時は、枯れた部分だけをすすするようにして食べていましたので、枯れると毒性が消えるかなと考えたのですが、新芽を食べられたバイケイソウの写真もネット上にはありました。また、やはり有毒のタケニグサにシカの食痕がついていたこともありましたので、毒に対して耐性をもつスーパージカが誕生しつつあるのかもしれない。



写真1 バイケイソウを食べるニホンジカ。2016年8月19日、奈良県十津川村旭

(清水善吉：松阪市日丘町1386-17)

アマクサシダとの出会い

篠 木 善 重

鈴鹿市八野町にある深谷公園は、かつて不燃物ごみの埋め立てが行われていたところで、現在は芝生広場や遊具広場も整備され、湿地帯を含めて里山の一部も残された、訪れる人も多い公園となっている。花木や草花の植栽も多いので、この辺りの里山環境に生息しているような昆虫類の多くが観察できる。自宅から車で20分ほどの距離なので、暇さえあれば足繁く昆虫採集に通っている。

数年前に、本会会員の桐生定巳氏からアマクサシダ *Pteris semipinnata* (写真1, 2) がこの公園には自生していると教えられ、自生地まで案内していただいた上、このシダの形態的特徴を説明していただいた。その後、昆虫採集の傍ら何度も観察している。長さは20~40cmほどで、遊歩道沿いの限定された斜面に生えていて、一部の株は除草作業の犠牲になることもあった。

イノモトソウ科のアマクサシダは、国内では本州(関東地方以西)、四国、九州、南西諸島に分布し、日本海側の北限は島根県である(島根県2013; 改訂しまねレッドデータブック2013植物編)。本種の頂羽片は長く伸び、側羽片は上下(前後)が非対称で、下(後)側の裂片は発達しているが、上(前)側の裂片は短小もしくは全くないものもある(写真2)。

みえ生物誌—植物(三重自然誌の会2018)によると、鈴鹿市以北の標本はなく、鈴鹿市からは高岡町で山内繁太郎が1981年に採集した標本が残されている。山内氏は筆者と同じ津市河芸町に住んでおられた方で、河芸植物友の会の人たちと一緒に南伊勢町方面へ植物観察に同行した思い出がある。亡父の同級生でもあった山内氏は、河芸町内の各所でも本種を採集しているので、是非とも地元で再発見したいと思う。

側羽片の上下(前後)が非対称であるという特徴や九州は天草に因んだ和名といい、山内繁太郎氏との関連も判明し、忘れられないシダ植物となった。

本種との出会いを作っていただいた桐生定巳氏に感謝します。



写真1 アマクサシダ 2018年2月25日



写真2 アマクサシダ 2019年4月11日

(しのぎ よししげ: 津市河芸町中別保2230-1)

水を揺らして餌を見つけるイカルチドリ

今 堀 聖 史

食べ物を見つけるために生き物は様々な工夫をしています。鳥類は食べ物を探すときには目を使っています。また、翼や脚などを目と連動させて食べ物を得ています。上空から獲物を見つけるトビは翼が大切な働きをしていますし、水中で魚を追って捕獲するカワウは視力とともに羽の特性が潜水に適していることが判ってきています。コサギやユリカモメは足踏みで、コガモやマガモなどは水かきで砂や泥を動かし、小魚や砂の中の餌動物を追い出して捕えています。

イカルチドリの地味な餌探しを紹介します。イカルチドリ（写真1）は体長19～21cmの留鳥で、水田、河川の中・下流の周辺に生息しています。個体数が多くないので目にする機会は少ないのですが、休耕田や稲刈り後の田でハクセキレイなどと一緒に採餌していることがあります。体色は褐色ですが、ネックレスのような黒い輪、額の模様、丸い瞳、黄色の脚でみつけやすいです。浅い水たまりがある休耕田や刈田を歩きながら、泥の表面や草、稲わらなどから小さなものを啄んでいます。

ちょこちょこ動きながら左右に目を配り、嘴の先で小さな物をつまむように食べています。一瞬、立ち止まったように見える時があります。双眼鏡やスコープで覗いてみても何をしているのか判りませんでした。撮影すれば何か見られるかもしれないと鳥の動きに合わせて何度も写し、モニターで確かめてやっと納得できる数シーンを見つけました（写真2）。連写は6.5コマ/秒なので、3枚の写真でも0.5秒の動きです。鳥が立ち止まって、瞬間に脚を上下して水を揺らし、小さな餌が水の揺らぎに反応するのを見つけるのでしょうか。あるいは、水の揺らぎで見やすくなるのかもしれませんが、小さな鳥の素早い脚技がコサギやユリカモメと似た行動なのも面白いです。イカルチドリの近縁種コチドリ（夏鳥）の採餌のようすは You Tube で紹介されています。

どの鳥も食べ物を得るための知識をたくさん持っていて、様々な技や工夫をしています。潮の満ち引きや草木の実、農作業などなど、鳥たちが自然や人間の暮らしを見つめていることに気がきます。“自然誌だより”がそんな面白さをメモしておく場として、もちろん学術的な観察や記録の場として永年続いていることの意義は言うまでもありませんが、これからも続いてほしいと願っています。



写真1 イカルチドリ。津市新家町，2010年8月3日。



写真2 イカルチドリの採餌（写真左から）。一瞬立ち止まって足を震わせ、さっと歩いて小さな餌を啄んでいた。瞬時の出来事で、足の動きと水面の揺らぎがなければ何をしているのかわからない。津市新家町，2012年9月12日。

（いまほり きよふみ：津市久居小野辺町1454-30）

ソウシチョウの記録若干

清水 善吉

春，林道を歩いていると，ひときわ大きく，きれいな声で鳴いている鳥がいます．その音量と音色はオオルリの鳴き声を大げさにしたようでもあり，さほど解するわけではありませんが，日本の自然のなかでは風情にかけるとも感じます．その声の主はソウシチョウという外来鳥で，ヒマラヤから中国にかけての地域が原産地です．ペットとして大量に輸入された個体が，飼育者やペット業者により遺棄され，1980年代から全国でみられるようになったようです．

県内では四日市市から熊野市にかけて記録が散見されますが（三重自然誌の会2018；みえ生物誌－哺乳・爬虫・両生類，鳥類），もっとも古い記録は紀北町船津における1996年の目撃情報です（佐藤1998；紀伊半島の野生動物，No.4）．隣の奈良県でも初記録は1994年です（井上・幸田1994；奈良教育大学自然環境教育センターの自然），ソウシチョウの定着が全国的には遅かった地域だったのかもしれない．

終活のひとつとして吐露しておきますが，小学校高学年から中学生の頃（40～50年前）に，野鳥の飼育に嵌ってメジロやウグイスをたくさん捕まえました．ソウシチョウはきれいな羽色をしていますので目立つ鳥ですが，この頃にはたしかにいませんでした．そこで，自分がこの鳥を最初に見たのはいつか気になったので，過去の野帳を調べてみると情報がいくつかありました．鳴き声による確認については確信が持てないので除外し，誤認の可能性が低い目撃例は以下の三例です．

記録

- ①熊野市紀和町和気_立間戸谷（標高100m）2002年12月31日15時20分頃，数羽目撃．
- ②津市美杉町八知_大洞山（同700m）2010年9月19日10時頃，数羽・カラ類との混群目撃（写真1）
- ③大台町大杉_大台林道（同1100m）2019年4月16日14時30分頃，数羽目撃（写真2）

分布情報の収集に関して，鳥類は私の専門外ですので記録としてはあまり残していませんが，現在は，本種のものと思われる鳴き声は各地で散見（聴）されます．30年ほどで全国に広がったことを考えると，きっと活発な性格なのでしょう．実際，飼育下では餌を大量に食べ，たくさんの糞を排出するようで，その糞を乾燥させて「うぐいすのフン」という美肌化粧品として商品化されています．旺盛な生活力を持つようですので，似たように生活をするウグイス等に悪影響を及ぼしていると推測できますが，明らかにはなっていません．なお，現在は外来生物法により特定外来生物に指定されていますので，ペット目的の飼育は禁止されています．



写真1 津市美杉町八知，2010年9月19日撮影



写真2 大台町大杉，2019年4月16日撮影

（しみず ぜんきち：松阪市日丘町1386-17）

資料の収集だけでは判らなかったこと

～三重県内のタマキビ科貝類の分布に関する新知見！～

中 野 環

タマキビ科の貝は大きさが1 cmに満たない巻貝です。三重県では、タマキビ、ウズラタマキビ、ホソスジウズラタマキビ、コビトウラウズ、イボタマキビ、タイワンタマキビ、アラレタマキビ、ヘソカドタマキビ、モロハタマキビの9種類が記録されています。なかでもタマキビ、アラレタマキビ、イボタマキビ、タイワンタマキビの4種は、個人コレクションのほとんどに含まれ、また多くの生物調査でも記録されることから、県内の分布に関しては十分に明らかにされているものと思っていました。しかし、これまでの認識を大きく変える重要な知見が得られ、三重県総合博物館から『三重県の海岸にすむタマキビのなかまをしらべよう』～貝の情報マップづくり～報告書として発行されたので(写真1)、その概要を紹介します。

調査は、タマキビ科4種の生息情報の収集を一般参加型で行われました。調査対象種が小さく、一般の方から提供される情報のみでは県内全域をカバーすることが難



写真1 報告書表紙

しいと考え、学芸員2名による2.5日間の補足調査の結果も反映されました。また、和歌山県の増田泰久さんや本会会員の中優さんら個人が実施した調査結果に加え、「みえ生物誌－貝類」(三重自然誌の会2018)に掲載された記録のうち、三重県総合博物館所蔵資料を除くデータが活用されました。さらに「みえ生物誌－貝類」刊行までにとりまとめることができなかった私個人のデータを追加しました。使用したデータのほとんどは、私自身が収集してきたものでしたが、175件の生息情報が活用されました。その結果、「みえ生物誌－貝類」では、タマキビ、アラレタマキビ共に津市以北からの記録はありませんでしたが、タマキビについては鈴鹿市から桑名市にも生息し伊勢湾全域に分布することが判りました。また、波当たりの強い岩礁域の飛沫帯に生息するとされているアラレタマキビが、鈴鹿市から四日市市にも生息していることが明らかになり、両種の分布域はこれまで知られていた地域から大幅に広がりました。また、転石海岸が広がり潮間帯に岩場がない七里御浜にもタイワンタマキビが生息することが判り、分布に関する新たな知見を得ることができました。

今回、私の自宅で眠っていた資料は、「みえ生物誌」や『『三重県の海岸にすむタマキビのなかまをしらべよう』～貝の情報マップづくり～報告書』に活用されたことで、初めてその役割を果たしたと思います。収集した資料はできる限り早く、目に見える形で活用することが大切であることを改めて感じることができました。

三重県総合博物館には十分に整理されずに眠った状態の貝類資料がたくさん保管されています。残念ながら私の手で整理を進め、公開することは叶わなくなったので無責任な言い回しになりますが、資料は保管するだけでなく、整理・活用することで、新しい知見が得られる貴重な資料になると考えています。

(なかの たまき：三重県立特別支援学校玉城わかば学園)

熊本県天草で見たハマナツメ

山 本 和 彦

昨年夏、ハマナツメを見に熊本県天草まで行ってきました。ハマナツメは、クロウメモドキ科の落葉低木で日本南部の沿岸部に生育する比較的希な植物です。一般に樹木は、一本の幹（主幹）を出し、枝葉を広げますが、ハマナツメは主幹がなく、20本前後の幹を根元から斜めに出し、特異な樹形をしています（写真-1）。一つ一つの幹は短命で、次々に新しい幹（萌芽幹）を根元から出し、更新するといった独特な生活史特性をもっています。また幹や枝には刺があり、果実は水に長期間浮くことができ、海流に乗って分布を拡げています。

私は、このハマナツメの分布と生態に興味を持つようになり、全国のハマナツメを見てやろうと、ここ20年ほどハマナツメを求めてあちこち歩き回っています。これまで三重県、和歌山県、岡山県、徳島県、高知県、大分県、宮崎県、鹿児島県等を訪れ、自然誌だよりも調査行の拙文をいくつか投稿してきました（山本2008；自然誌だより、No.77；山本2010；同、No.84・85）。

九州には熊本県、長崎県にもハマナツメが分布していますが、長崎県では中西弘樹先生により詳細な分布情報が報告され（中西2015；長崎県生物学会誌、No.77）、熊本県では熊本県植物誌（熊本記念植物採集会1969；長崎書店）に自生地がいくつか記載されています。この2県はまだ行ったことがなかったため、まず、2014年に水俣市の海岸部を歩き、1株のハマナツメを確認しています。その後熊本県はご無沙汰していましたが、熊本県植物誌には天草からの記録が多いことから、一度天草方面へ行ってみようと思っていました。しかしながら、記載された地名だけでは、天草のどこへ行けば確実にハマナツメを見ることができるのかさっぱりわかりませんでした。そのような中、知人の知人から天草の植物に大変詳しい徳留一生先生を紹介してもらい、天草に見られるハマナツメ自生地を案内してもらうことになりました。天草は記録的な猛暑と日照りでしたが、徳留先生には3日間現地でお世話になり、ハマナツメの自生地や三重県では見られない植物等々について多くのご教示をいただきました。以下に案内していただいた6ヶ所の生育地とその生育状況についての概要を記します。



図1 天草諸島におけるハマナツメの分布。①松島町合津高杣島、②栖本町馬場栖本干拓、③倉岳町宮田、④栖本町馬場白戸、⑤新和町小宮地二垣、⑥牛深町須口

上天草市松島町合津高杣島(図1-①)

高杣島は、島原湾に浮かぶ標高138m、周囲約1.9kmの小さな島で、干潮時に対岸の樋合島から歩いて渡ることができる照葉樹林に覆われた無人島です(写真-2)。ハマナツメは、島の東側に広がる礫浜の奥に1株だけ生育し、高さが約3m、幹数8本、高さ40cmでの幹直径(以降、直径と略す)0.5~5cmの個体でした(写真-3)。このハマナツメの付近にはハマボウ、トベラ、マサキが多く見られ、林床には逸出したと思われるウチワサボテンが目立っていました。

天草市栖本町馬場栖本干拓(図1-②)

栖本干拓地の南端に施設された用水路の壁の隙間から、高さ約3m、幹数8本ほど、直径4cm前後のハマナツメ1株と幼個体1株が生育していました(写真-4)。干拓地が造成される前は、周辺にはハマナツメの群落が広がっていたかもしれません。

天草市倉岳町宮田(図1-③)

倉岳町宮田の宮田漁港東方約1.6kmにあるオチヨド鼻の岩石海岸に4

株のハマナツメが生育していました。高さは3~4mありますが、4株とも幹数は2~3本と少なく、直径も2~4cmで、痩せたハマナツメでした(写真-5)。土壌の未発達な岩場という立地条件の影響によるものかと思われます。

天草市栖本町馬場白戸(図1-④)

栖本港と白戸を結ぶ道路沿いに2地点の生育地がありました。両者は道路の南側と北側に500mほど離れて生育し、南側のハマナツメは道路沿いの高さ約2.5mの石垣の上や下、および隙間などから、合わせて6株見られました。石垣上のハマナツメ集団はアラカシやクヌギの下に生育し、ダンチクと混生していました。高さは最大株で約2m、8本の幹が出て、最大直径2.5cmでした。他の個体はこの株よりも小さく、中には幼株かと思われるものもありましたが、よく見ると全個体に伐採された跡があり、道路管理のために時々切られているものと思われます。

一方、北側には樹高約7m、幹数3本(直径10.6, 3.8, 1.4cm)の大きなハマナツメが1株見られました。この個体はアラカシ林の林縁に生育し、太い幹の一部が腐朽しており、萌芽幹もなく、かな



写真 1.ハマナツメの樹形(天草市牛深町須口, 2018年8月27日)。2.高杣島満潮時には礫浜(砂州)が海面下に沈む(上天草市松島町合津, 2018年8月26日)。3.高杣島のハマナツメ(2018年8月26日)。4.栖本干拓地の用水路上に生育するハマナツメ(天草市栖本町馬場, 2018年8月26日)。5.岩石海岸に生育するハマナツメ(天草市倉岳町宮田, 2018年8月26日)。6.荊神社御神木のハマナツメ(天草市栖本町馬場, 2018年8月26日)。

り衰弱している状態でした。

天草市新和町小宮地二垣（図1-⑤）

八代海に面した磯浜海岸の奥に、成株10株と幼株2株を確認しました。成株は高さ5m前後、株の幹数は5本ほど、太い幹で直径6cmほどでした。どのハマナツメもダンチクと混生し、ダンチクの群落の中に埋もれているといった状況でした。早晩ハマナツメはダンチクに駆逐されるかもしれません。

天草市牛深町須口（図1-⑥）

須口浦に面した砂浜と背後の山地斜面の接点付近にハマナツメの小群落が一つありました（写真-1）。群落内には2株のハマナツメが生育し、ダンチクやトベラも混生し、近くには幼株が2本生えていました。このハマナツメは他の生育地のものと比べ、成長もよく、一つのハマナツメの幹数は25本、最大直径8.5cm、もう一つは幹数16本、最大直径6.2cmありました。両株とも根元から萌芽幹が出ており、幹の更新も健全に行われている感じを受けました。

天草地方におけるハマナツメの自生地は以上の6地点の他、天草市楠浦町の海岸部にも一ヶ所あるとのことでした。今回、時間等の都合で現地調査はしませんでした。徳留先生によると高さ2.5mほどのハマナツメが1株見られるとのことでした。

また今回の調査の途中で、ハマナツメが御神木となっている興味深い神社も紹介してもらいました。この神社は栖本町馬場の水田地帯の中に建っている小さな神社で、^{いげ}荊神社と呼ばれています（写真-6）。刺がのどや手足に刺さったとき、この神社にお参りすればすぐに治るといわれ、また、諸願成就の御利益もあるとのこと。参拝者も多いようで、多くのおみくじやお守りがハマナツメの枝にしばりつけられていました。境内にはハマナツメの他、クスドイゲやヒイラギなどの刺をもつ木も植栽されていました。

熊本県におけるハマナツメの個体数は、今回の天草と2014年時の水俣市での調査とを合わせると、27個体となりました。熊本県植物誌（前掲）の記載や徳留先生の天草での詳細な調査から推測して、今後、新産地発見による個体数の大幅な増加は考えられないのではと思っています。

（やまもと かずひこ：尾鷲市小川西町8-40）

事務局から

○三県合同フィールドワークが6月29-30日に奈良県和佐又山で開催されました。メールアドレスを把握している方にはご案内しましたが、たよりの編集に手間取って本誌の発行には間に合いませんでした。申し訳ありません。メールで時々イベント案内等もしておりますので、未登録でご希望の方は下のアドレスに「登録希望」としてメールしてください。

編集後記

今春は、夏日が何日か続き、昨夏のような厳しい夏を予想させてくれました。今号は原稿が集まらず、私の古い記録を引っ張り出したり、依頼を直接したり、頁数超過（原則2頁以内）にも目をつぶりました。次号は9月発行予定ですので、ご投稿をよろしくお願いします（善）。

自然誌だより120号 Mie Natural History Research Group News No.120

発行日 2019年6月28日

事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）

e-mail:mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp